

## ラウンドテーブル E会場

## いま、書くこと・作文教育を問う

キーワード [ 書くこと 作文 青木幹勇 東井義雄 巳野欣一 授業構想 ]

## (1). 企画代表者

菅原 稔 (兵庫教育大学)

話題提供者 &lt;50音順&gt;

大内 善一 (茨城大学)

菅原 稔 (兵庫教育大学)

宝代地まり子 (京都女子大学)

町田 守弘 (早稲田大学)

## (2). 企画趣旨

今回のラウンドテーブルの趣旨は、一言で言えば「わが国の『書くこと・作文教育』の『これから』を、『これまで』の歴史と成果、そして現在の状況をふまえて明かにし、あるべき姿を提言する。」ことに尽きる。

我が国の書くこと・作文教育は、戦前・戦後を通して、理論的にも実践的にも多様で豊かな展開を見せ、すでに膨大な成果と業績が集積されている。しかし、その一方で、今もなお学習者の「作文嫌い」が克服されたとはいえない。

「伝え合う力」としての書くこと・作文教育が求められる今、あるべき書くこと・作文教育とはどのようなものなのか。その意義・目的・内容・方法は、どうとらえられるべきか。これまでのわが国における書くこと・作文教育の歴史と理論・実践の集積から何を学び継承し発展させて行くべきか。改めて、これらの課題に取り組み、新たな展望を切り開くことができればと考える。(菅原)

## (3). 概要

## ① 青木幹勇の

「書くこと(作文)」の指導実践研究に学ぶ  
— 文章表現観の変遷を辿りつつ —  
大内善一 (茨城大学)

青木幹勇は大正15年10月に教員検定試験に合格し19歳で宮崎県高千穂小学校に赴任してから昭和47年3月に東京教育大学附属小学校を退官する

までのほぼ半世紀を教師として過ごしている。なお、青木は附属小退官後も全国各地の研究会に招かれては実地授業を公開してきた。青木の昭和から平成に至までの国語教育実践研究史はそのまま我が国の同時期の国語教育実践研究史に通じる面がある。

大内はこれまでに青木幹勇国語教育実践研究史に関して別紙資料に掲げるような考察を行ってきた。青木幹勇の国語教室の理論は外部からの理論の受け売りや時流に棹さして提唱されたものではない。それは子どもと共に学び様々な試行錯誤を繰り返すことによって生み出されてきたものである。そのために青木の実践理論には無理や硬さがなく教室の現実に即した平明さと緻密さが備わっている。

さて、別紙資料に掲げた大内による一連の青木幹勇研究において大変興味深い事実が明らかになった。それは青木幹勇の文章表現指導観に大きな転換があったという事実である。詳細については、当日の発表資料において触れることとして、以下にその変遷の概略の項目を列挙することで示しておこう。

㊦戦前の「生活綴り方教育」との出会い、㊧昭和20年代 — 生活体験重視の指導観、㊨昭和30年代 — 読むことと書くこととの連合、㊩昭和40年代 — 題材観の転換、㊪昭和50~60年代 — 「フィクション作文」の提唱と「第三の書く」。

以上の変遷に見られる青木の「生活綴り方」から「フィクション作文」への緩やかではあるが極めて劇的な転回から「書くこと(作文)」指導の<これから>の道を探っていきたい。

## ② 戦後の「書くこと・作文」実践の展開に学ぶ

— 東井義雄・戸田唯巳・

小西健二郎の実践とその成果 —

菅原 稔 (兵庫教育大学)

戦後の書くこと・作文教育実践を代表するものと言える下の3つ実践記録は、いずれも書くことを書くことと意識しない指導によって、逆に優れた成果をあげたものである。いま、これらの実践記録から何を学ぶことができ何を継承することができるのかを考えたい。

小西健二郎『学級革命』1955 牧書店  
戸田唯巳『学級というなかま』1956 牧書店  
東井義雄『村を育てる学力』1957 明治図書

### ③ 巳野欣一氏の

「書くこと」の学習指導研究に今学ぶこと  
— 中学校に限定して —  
宝代地まり子（京都女子大学）

- 1 「主体的学習」を支える「書き方の指導」という視点に立つ必要
  - ㉞ 内発動機や発想に関わる目的意識・相手意識・場意識の明確化と題材指導に意を尽くすこと。
  - ㉟ 「何を書くか」を充足する「取材」の学習指導に意を尽くすこと。
  - ㊱ 「書く力としての評価」という視点に立ち、「目標と評価の一体化」を図ること。
  - ㊲ 文章製作過程における学習者の「つまずき」を十分予測すること。
  - ㊳ 「つまずき」の場に応じた指導の「くさび」が打てるよう多様な指導法の準備をすること。
- 2 「情報創造」に関わる「書くこと」という視点に立つ必要
 

そのうえで、発展的な学力保障に関わって

  - ㉞ 「要約・抜粋の技能」、「メモ・記録の技能」という「情報処理」に関わる「書くこと」の学習指導を行うこと。
  - ㉟ 「レポートの書き方」等形態別の技能（コミュニケーション・スキル）指導を行うこと。
- 3 「書くこと」は「人間形成」という視点に立ち、発達段階と文章の機能に応じた「書くこと」の指導を踏まえること
- 4 時間数削減にあって、「1」～「3」の実現のために計画的・段階的な指導、および国語科と総合的な学習の時間を統合した計画の必要
 

国語科における技能指導と総合的な学習等における応用・活用を見越した教育課程の計画。
- 5 指導者の力量形成のために、国語科表現指導

論に関わる「基礎研究（①～⑩）」を踏まえること

### ④ 学習者の現実に即した作文の授業構想

— 書くことへ向かう意志を生かして —

町田守弘（早稲田大学）

いま、書くこと・作文教育を問うときに最も重要なことは、まさに「書くこと」と「作文教育」とを有効につなぐことである。学習者の日常における「書くこと」と国語科の授業における「作文教育」とを、直接関連づけることを工夫してみたい。子どもたちが文章を書かないという声をよく耳にするが、彼らの書くことの現実はいわゆる多用である。多くの子どもたちは、常に携帯電話を所持してメールの交換に熱中する。インターネットを通して膨大な量に書き込みがなされる場面において、書き込む主体はほとんどが若い世代である。子どもたちは、決して書くことが嫌いではない。このような学習者の書くことへの意志を生かした授業構想が求められる。

書くことの授業構想をする際に、特に配慮したいのは次のような点である。

- ㉞ 書くことに対する学習者の興味・関心および意欲を喚起する。
- ㉟ 書くことの具体的な場所を設定する。
- ㊱ 書くことの効果的な教材を発掘する。
- ㊲ 学習者を円滑に書くことへと誘うための課題を工夫する。
- ㊳ 書くことの方法に関する指導を充実させる。
- ㊴ 他の領域・事項との関連について配慮する。

さらに、国語科という教科の枠組みの中だけではなく、日常生活と一体化した学習を組織するような配慮も必要になる。作文教育の目指すところの一つは、学習者に書く習慣を身に付けさせることである。そのためには授業時間の中だけではなく、彼らが年間を通して継続して取り組めるような学習課題を工夫してみたい。効果的な年間課題によって、読むこととの関連に配慮しつつ、書くこと的前提となる漢字力・語彙力の育成や表現に関する関心の喚起を達成することが、作文教育の重要な基盤となる。

今回のラウンドテーブルでは、学習者の現実に即した具体的な授業構想を提案させていただきたい。